

大学の授業を考える

学生の現状を踏まえよう

大学の講義をどのような基礎に立って、具体的にどのようなように実施するかは、現場の教員にとってなかなか難しい。私自身にもよくわからない。

「本来、大学は自由に学ぶところであって、教えを乞うところではない。教師は学生の勉学のガイドであって、方法論や認識論つまりまとめ方や考え方、データの取り扱い方についての指針を示せばよいのであって、知識のみがつまっている事典代用品ではない」

現代の大学教員のほとんどがこの意見に賛成ではなからうか。私自身もそうあって欲しいと思っている。だが現実には厳しい。本学の学生の大部分は自主的に勉学を進めることができるほど大人になっ

ていない。前記のような考えて学生に接すると必ずなんらかのすれちがいが生ずる。

現在の学生の現状については『大学時報』(昨年十一月発行)に筆者の見解をまとめた。詳しくはそれを見ていただきたいが、結論的には次のようなことをかいた。「現在の大学生は充実した学生生活を送っている少教の集団、大多数のその日暮しの集団、そしてやはり少数の大学からドロップアウトした集団の三つに分けられる。同志社大学では、その比率がそれぞれ一五、七〇、一五パーセントぐらいである」第一の集団は自主的に勉学できる学生とサークルなどで活躍している学生であり、第三の集団はまったく大学には出てこない学生なので講義の受けてとしてはどちらも資質が高くない。教育の効果の期待できるのは、第二の集団である」

こうした分析の上になつて、この小文では前記の第二の集団を対

横山卓雄

象とした大学の授業について考えることにする。

学生たちの意見

授業に対する学生たちの意見を挙げてみよう。アンケートや総合科目のまとめの討論で述べられた学生たちの意見である。

楽勝講義について

『登録者が千人ぐらゐのクラスなのにふつうは七、八人しか出席していない。第一回の講義のときに「私の話を聞きたい人だけが出席して下さい。成績はレポートでつけますが、レポートのテーマは講義内容とは全く関係がありません」と先生がいったんです。レポートを出せば全員合格らしいです。講義内容がかりに最高だとしても出席する気になりませんよね』〈文二回生…女、談〉

『前期の間は講義内容に興味があつて全回出席しノートもほぼ完全に取った。前期のレポートはほんとうに頑張つて自分としては最上のもので書いたつもりです。後期になつてつてすぐ教師が「前期のレポートは提出者全員が合格です。レポートをだした人は単位がもうあります。あとはときどき出席して小レポートを提出してくれば点数がよくりますが」と言っていた。自分の努力が評価されないのかと思つて熱が覚めてしまい、後期はまったく出席していません。友達に「どうしたの前期の頑張りには比べると雲泥の差ね」とひやかされています』〈文一回生…女、談〉

これらの意見にみられるのは、自己の努力を正當に評価してもらいたいという気持ちである。勉学は自己のためにするのだとわかつ

ていても、それだけでは勉学を続け、つねに努力するエネルギーがわいてこない。いうなればまだまだ大人になりきつていない現在の学生が現れていると言つてよい。

きつい授業について

『大学に入学し、最もキツイ授業でしたが、質、量共に高い私大の授業に十分見合うものでした。キツイ思いをした分、今満足しています』〈法二回生…男〉

『出席しなければ……といつも思つて、しんどくても出席し、最後の最後によい点数をつけていただき、やはり、努力すればそれなりに成果がでるものだと思ひ、そういう意味で、とてもためになりました』〈経済二回生…女〉

『先生の講義は受ける張り合いがあつた。他の講義は試験一発勝負という感じがしたが、この講義は受けて勉強しただけ返ってくるものがあるような気がした』〈商二回生…男〉

『前期はシルクロード後期は南山城の古代、通年はこの講義で、お世話になりました。おかげでというか入学して一年目にしてレポートの山にうもれてしまいました。知識はない、根気も体力もないという中、友人達には「レポート、レポートといつもいつてる」といわれつづけてきました。「テストよりはいい」と思ひつつ、ひらきなおるまでは時間がかかりました。後期になつて思い切れるまで、学校が嫌になりつつあつたのですが、とにかくこまでやつて来れたのでお礼を申しあげます。来年からは「授業料の分はとりもどす方式で出て来よう」と決心しています』〈文一回生…女〉

以上四つの意見は、私の講義「地球と宇宙の科学へ自然分野」の

第1表 レポート・テスト結果 <地球と宇宙の科学：横山卓雄担当>

	1988年度		1989年度	
	田辺	今出川	田辺	今出川
登録者	427	121	141	146
全欠席者	43	50	25	60
前期レポート提出者	271	47	94	62
前期レポート合格者	0	0	1	0
後期レポート提出者	205	45	80	54
後期レポート合格者	126	27	49	37
テスト受験者	105	38	58	52
(全欠者)	(19)	(11)	(6)	(12)
テスト合格者	57	17	38	22
テスト放棄者	186	38	25	60
	<44.9 %>	<31.4 %>	<17.7 %>	<41.1 %>
総合合格者	183	44	92	57
	(42.9 %)	(36.4 %)	(65.2 %)	(39.0 %)
………全欠者を除く	<47.6 %>	<62.0 %>	<79.3 %>	<66.3 %>

○数字(単位のない)は人数を示す。

○全欠席者とは、年間約18回の出席チェックに1回もひっかかってこない学生である。このうち2割～4割がテストだけを受けにくる。合格するのは3～5名である。

○出席をとるとテスト放棄者の割合がふえる。しかも大規模クラスほどその率が大きい。

期末アンケートに書かれたものである。
総合科目について

『私は四年生ですが、専門の講義がおもしろくないので、去年ある一般教育科目を受けてみたところ非常に興味がわいたのです。単位は足りていますが、この講義を受けています。』(商四回生：男、談)
以上、現在の学生のうち比較的眞面目で、教育の受けてとしては

資質の高い学生たちの意見の実例を挙げてみた。彼らはけっして勉強したくないのではなく、きつい講義が本質的に嫌いなものでもない。勉強したい、努力すべきであるという気持ちをつねに持っている。ただ結果が目にもえないと力がいらないのである。

講義に頑張つて参加し勉強した学生も、さぼつて勉強しなかった学生とともに「楽勝講義ばかりとつていては駄目なことは良くわかっていきます。でもやはり、登録するときにはどうしても楽勝講義を選んでしまうのです」と言う。

ここで問題になるのは、こうした学生を相手にどのような講義を行い、どれだけ学生を授業に引き付けられることができるかであろう。

では、どうするか

まず、最近の私の講義のシステムの一部分を紹介し、御批判を求めたい。

一、単位を取得する機会を複数にする

六月に前期レポート、十一月か十二月に後期レポート、学期末にテストを行い、そのどれかで合格すれば単位を与える。三回のうち二回が未提出、未受験でも、一回が合格点に達していれば単位取得できる。前期レポートは八一点、後期レポートは六〇点で合格である。テストは一〇〇～二〇〇の穴埋め問題で、普通四〇～六〇点で合格である。一九八八、一九八九年度の結果を表に示しておいた。

なぜ単位取得の機会を複数にするかというと、学生の多数が「たった一回のテストやレポートで正確な評価はできないはずだ」とい

第2表 前期・後期レポート得点分布 (1989)

得点	今出川		田 辺	
	前期	後期	前期	後期
98-90	0	0	1	1
89-81	0*	4	0*	10
80	1	4	7	12
79-70	9	23	16	24
69-60	1	4*	1	1*
59-50	5	6	12	13
49-40	9	6	10	2
39-30	6	0	2	0
29-20	8	0	3	0
19-10	2	0	1	0
9-1	1	0	1	0
0	4	2	22	2
不	16	3	18	12
未提出	84	94	28	63

<不：読むに値しないもの *：合格点>

○後期は40点以下の点をつけていない。
実質的には40点だけゲタをはかせて
いることになる。

うからである。私自身は経験から機会を複数にしても結果はほとんど同じだと思っている。ただ学生がこのように主張して逃避することが多いので、弁解のできないようにしてやる必要を感じるからである。

前期レポートは毎年数人しか合格しない。学生間では「同大で最難関のレポートで、合格すると自慢できる」といわれている。採点する方としては、おまけする必要がないので気分が良く、ストレス解消になる。一九八九年の得点分布を次表に示した。これらのレポートはコメントをつけて十一月と一月に返却している。

二、日常の努力を評価する（出席をできるだけ取る）

出席の問題については一度学生たちとじっくり話し合ってみたことがある。ふたたび学生の意見を紹介してみよう。『私の通学時間は二時間程なんです。朝頑張って一講時に出てきても、ただ講義を

聞いているだけだと損をしたような気がします。出席をとられたりコメントの提出があつたりするとなんとなく満足してまた出てくる気が起きます』『大学にきてても友達もいない。一日中一言も声を発しないことがあります。大学に出てくると損をした気がします。出席票をだすと大学へきたかきがあつたとおもつて気分がいいです』

こうした意見は私にとつては意外であつた。想像を絶したと言つてよい。このように真面目な学生ほど出席をとると喜ぶ傾向がある。だが彼らはそれを表現しない。他の学生、そのほとんどは不真面目な学生だが、の声を気にしている。こうした現実に対応するのはいかどうかは疑問だが、私は対応することになっているわけである。

この場合ただ出席をとるのではなく、平常点を評価するために必ず講義やスライドについてコメントをしてもらう。コメントとは「批評と感想」だと学生に説明する。このコメントをプラスマイナス五点で採点し、平常点とする。学生はよく「どうして出席したのにマイナス点がつくのですか」と聞く。それには「学生の中で最高なのは授業に参加してよく勉強する人なのは当然ですが、つぎに良いのが出てこないで勉強する学生、そして出てこないで勉強しない学生の順です。最低なのが出席して、講義を聞かず勉強もしない学生でしょう。出席しない学生は少なくとも講義の邪魔になりません。出席そのものはプラスでもマイナスでもないのです」と答えている。

一九八九年度の平常点分布を図に示してみた。この平常点をレポートやテストの点に加えて学籍簿の点数として報告する。学生にもそう伝えてある。図のピークAは自分で学習する学生、B、Cは頑

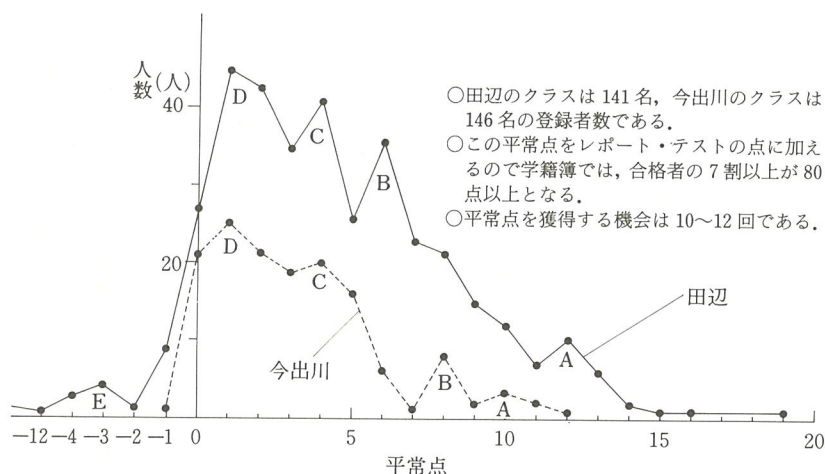


図 1989 年度<地球と宇宙の科学>における平常点分布

張って講義に参加している学生、Dは惰性で講義に出ている学生、Eはドロップアウトの集団であろう。教育効果が現れているのはBの集団である。

悩みは多い

単位の与え方と平常点(出席の取り方)についての工夫を述べてみた。そのほかにもいろいろ工夫して講義をしてみている。ともかくも学生に講義を受けることに対する満足感を保証することが目的である。しかしこうした工夫をすることは、教師にとつては決して楽ではない、いかに努力しても自分にとつて目に見えた利益にならない。努力するエネルギーをどう補給するかが問題なのである。まあ趣味だと思つて楽しくやるべきであろうが、制度的にもう少しこうした教師の努力をバックアップする必要があるのではなかろうか。

たとえば出席を事務的に取る週を決めて全学いっせに行い(立命館大学で実施している)、データを公開するとか、休講率を発表するとかして、在外研究の順位の基準とする。また定年延長のときの資料にするなどである。教師自身の自己管理のエネルギーとはならないだろうか。私にも良くわからない。ただ現状は決して良いとはいえないと思つている。

いろいろ書きたいことも多いが紙面が尽きたので、まとまりがなくなつたが終わりにしたい。

(大学工学部教授)

ミシガン州立大学の授業

北尾 謙 治

はじめに

同志社大学の教壇に立つて早くも一〇年以上が経った。その間先輩の先生方や学生諸君の意見を拝聴したり、観察や調査による学生諸君の種々のフィードバックを慎重に検討して、何とかよりよい授業をするように努力してきた。

幸いにも一九八五年秋から二年間ミシガン州立大学で在外研究を行った折りに、コミュニケーション学科の先生方と近く接し、またその授業も担当する機会があり、当大学の授業のあり方、先生方の取り組みかた、学生の学習態度等詳しく知ることができ、今日の授業の改善に大いに参考になっている。その一部を紹介する。

明確な授業内容

設置されているすべての教科は、その目的、範囲、教授する主な項目、履修後の期待されるべき成果が明確である。それで、どの教師がクラスを担当しても最低限度の教育内容は同じであるし、あまり範囲をはずれた授業はしにくくなっている。これは各々の専攻は全体像を見渡してクラスを設置し、指定したクラスをすべて履修することによりその専攻の全域をうまくカバーすると同時に、履修する順序も時には指定して学習効果を上げるようにしているので、クラス内容が変わると困るからである。

同種のクラスが多く設置されている場合は、コーディネーターが原則としており、個々のクラスの内容や評価があまり食い違わないようにしている。それで、どの教師のクラスをどの学期に履修しても内容はあまり異ならない。

アメリカの大学のテキストには、各項目のまとめ、参考文献、復習問題等も含まれ、学習者が学習しやすく、その内容を分かりやすく理解できるように作成されているものが多い。それでテキストを見るだけで、その科目の全体像とそれがカバーしている重要な基本項目が明確に理解できる。

ほとんどのクラスでは、第一目にシラバスが配布され、クラスの目的、内容、使用テキスト、具体的な評価方法、学期中の各クラスの講義内容とための学習範囲、テストやレポート提出の日時、出席等に関する規則等が記載され、詳しく説明される。これにより学習者はどのように学習をすればよいか、いつ何を学習すればよいか、よい成績を取るにはどのように学習をすればよいか等が理解できる。この内容は法的な契約と同じで、教師は勝手にその内容を変えられず、学習者の学習を保証するものでもある。

クラスは、予定された内容を教師が詳しく説明し、全学習者に理解できるように進められていく。予定された内容のすべてカバーしなければならず、分かりやすくするために、よい例をあげたり、資料を提示したり、視聴覚機器を使用したり、種々の努力をしている。全員に理解させるのは教師の義務とみなされている。

学習者は教師の説明が明確でなければ質問をし、教師はすべての質問に答える。また、学習者は教師の説明にコメントしたり自己の経験を付け加えたりして、自己の理解が正しいかどうかを確かめたり、他の学習者の理解を手助けする。アメリカではこのように教師と学習者が互いにやりとりしながら学習し、教師が一方的に話して終わる授業はない。このクラス運営は四く五百人の大教室でも同じ

である。

クラスは教えるだけで終わるのではなく、学習者の理解を確かめ更に深めるために、討論、プロジェクトやレポート等種々の活動が盛り込まれている。大教室でもいくつかの小クラスに分かれてアシスタントを中心としてそのような活動が行われる。討論、個人発表、レポートやプロジェクト、小テストや中間テストはすべて教師がアシスタントが丁寧に評価とコメントをする。テストやレポート等は単なる成績をつけるためのものではなく、学習の一貫で、最終試験を含めて必ず返却される。

テストやレポートもその問題や課題が明白に説明され、学習者がどのように取り組めばよいか指導される。その指示が悪いと、後で種々のトラブルが起こり、この場合は学習者ではなく、教師の責任が問われることになる。

評価も同様に客観的で、学習者がその内容と理由を明確に理解できるものでなければならない。減点の場合はなぜ減点かが明確で、教師の独断で主観的に評価することはない。

このように学期の途中に何度も学習状況に対してフィードバックがあり、学習者は自己の学習状況が分かるのみでなく、自己が理解出来ていなかったことも分かる。それでもまだ理解できなければ、教授に個別面談をして分からせればよい。これを基にさらに学習して学期末までにその学科の重要項目を理解すればよい。

徹底した個人指導

アメリカでは教育の基本的な考え方は個人指導である。教師はクラスに七〇人の学習者がいても名前と顔を覚えることが期待されている。事実登録日の翌日の正午までにはすべての教師は名簿を受け取り、最初の授業で登録者の確認のため名前を呼ぶと、多くの学習者からはファーストネーム、ニックネームやミドルネームで呼べとの注文がつき、教師はそれを書き込み、必死で顔と共に覚える。そして優秀な教師は学期末までにほぼ全員覚える。

クラスでも皆同じであるとの方針で運営すると、軍隊みたいだと文句がでる。個人個人の特性を生かしたクラス運営を要求される。各学習者には各々の癖があるので、それに対応するのは並み大抵ではない。

クラスでは全学習者が理解できるよう指導しなければならない。そのため種々雑多の質問やコメントをすべて授業でこなす。どの学習者から文句や要求がでて、その内容が如何に不当なものでも、その学習者を説得することが義務づけられている。最低週に二時間はオフィスアワーを持ち、オフィスで学生の指導にあたる。それ以外の時間でも学生から要求があれば、面会して指導する必要がある。試験やレポートの評価等の質問には必ず答えなければならぬ。この個人指導を十分にしなければ、学生は学科長や大学の若情処理係に申し立てることになり、より手間がかかる。

個人指導で最も困難なことは、途方もない要求をしてくる学生を

説得することである。このレポートの課題が不明瞭であったので自分はこうに書いたとかはまだしも、自分の全科目の平均点は三・七でこのクラスでは三以下がつくはずがないとか、自分の父は大学教授で頭がいいはずだからこのような悪い成績はつくはずがないとか考え及ばないことを言ってくる学生が必ず二〜三名はいる。

相手の言い分を認めれば満足して納得するが、それでは公正な評価が危ぶまれる。それで、公正な評価をくずさず、客観的で相手の感情をさかなくてずに対処するのは相当の時間、努力と忍耐が必要だ。

教科に関連して種々の個人的な問題を持ち込んでくるが、どのようにに対処していいか検討もつかないものもある。しかし、各々に何等かの処置をしなければならぬ。この場合一律に同じ規則に当てはめて処置をしようとするとは問題が生じる。必ず各自の言い分をよく聞いて、原則からあまりはずれずに、それぞれに最も適した処置をしなければならない。

教師は学生のサービス機関でもあり、自宅に気楽に試験やレポートのことで電話して来る学生もいる。このようなことでも一概に教科のことは大学で処理すると言いきれないのが現状である。また試験等も決められた時間に受けられないから特別に受けさせるようなサービスも必ず必要である。

学習者は各クラス毎に授業料を支払うので、単位を取得できないようなことになるは大変である。それで何とか全員がパスするように、根気よく丁寧な個人指導が行われ、よほどでない限り全員合格している。

発達した教育支援体制

大学側も教師が十分に教育できるような支援体制を整えている。まずクラスの登録であるが、定員を厳格に守っている。名簿も最初のクラスからあり、同志社大学のようにクラスに何人学生がいるかすら分からずに始めるのとは大違いだ。

要求すればアシスタントをつけてくれ、出席の確認、教材の準備、評価の補助、落ちこぼれのフォローアップ等をしてもらうことも可能である。

テストやハンドアウトは原稿を渡せば学科の秘書が迅速かつ正確にタイプして印刷をわずか一日でやってくれる。

視聴覚機器や教材も非常に使用しやすいように考慮され、各クラスにはOHPはすべて備えられ、ビデオをよく使用するクラスは予めビデオを設置した教室で行う。学科にはビデオ教材も豊富に蓄積されており、自由に使用できる。この専門の技師もあり、録画や種々の要求に答えてくれる。大学には更に規模の大きいメディアセンターがあり、映画やビデオの蓄積保管するのみでなく、他の大学や教育機関等からの借りだし等の作業をしている。ここに電話で映画等の予約をすれば、指定した時間、場所に担当者が来て上映してくれる。

学生に読ませたい副教材の図書は図書館の一角に特別に保管してもらい、短時間の貸出をすることもできる。図書館は平日は朝八時から夜の一時まで、週末でも日に一〇時間程度は開館しているの

で、多くの学生に利用させられる。

テキストの付属教材、以前のハンドアウトや以前のテストの問題もすべて整理されて集積されており、いつでも自由に使用できる。

これで変化のあるクラスをしたり、テストの練習等も簡単にできる。最も感心したのは、マークシートによるコンピュータ採点である。休日なしで朝八時から夜一二時まで受け付け、二四時間以内の返却保証である。単に成績のみでなく、教師の要求する統計処理結果もくれるので、成績をつける上で調整に使用したり、各問題の分析もあるので、クラスの指導にも大いに役立つ。何分二四時間以内に統計結果もすべて出るので、学習者の学習状況を把握する上で非常に役立つ。この制度はカリキュラムの変更等の学生のアンケートにも非常に便利で、種々の目的で利用されている。

最終成績を提出する用紙も実に合理的で、コンピュータのマークシートを改良したもので、成績を黒で塗りつぶし、横に同じ成績を数字で書く。秘書がそれを照合して教務に送り、そこからまとめてコンピュータセンターに行き、各クラスの最終成績の処理を行い、各学生毎の平均点等を含めた成績を打ち出して、四日以内には各学生は各自の成績表を郵送で受け取る。

以上のようなことができるのはコンピュータが教育に非常に寄与し、コンピュータセンターは年間休みなしで二四時間操作をしているからで、研究者や学習者は夜どおしでも使用可能である。コンピュータ関係の学習は実験コンピュータを使用しての作業中に、種々のトラブルに出くわすが、そのためのカウンセラーもいて、種々の質問に答えてくれる。

このようにきめ細かい教育は教師を中心に行われているが、それをサポートするための体制もできあがっており、各部署が協力して学習者によりよい学習条件を提供している。

おわりに

帰国後は、ミシガン州立大学で知ったことで、文化や制度の異なりにかかわらず、教育向上に役立つことは少しずつ実施している。クラスの目的や範囲、評価方法等を明確にしたり、小刻みにテストやプロジェクトをして学習者にフィードバックを与えることはまず実施した。視聴覚教材をより多くして、学習者の関心を高め、理解を深めるようにも努力している。図書館には個別読解用の英語の図書のコーナーもでき課外の読書指導も可能になった。しかし、名簿はまだ四月末にしか入手不可、コンピュータ採点は技術的には可能だが、事務体制の協力が得られず未だに一般クラスでは使用できない。課外にビデオ教材を見せたり、コンピュータの端末機を使用させたり、図書館で特定の図書を特殊な方法で読ませたりするのは容易ではない。他にも問題は山ほどある。それを解決するには、施設の改善の他に、教育効果を上げるための全学的な協力体制が必要で、各々の部署のコミュニケーションの向上と協力が前提で、今後も引続き関係者に協力を呼びかけていくつもりである。読者の方々もミシガン州立大学と各自の学校教育を比較して、改良出来ることを、少しでも努力して頂ければ幸いである。教育の改善は教員や職員のみのも

力ではなく、学習者の努力も大いに重要である。(大学商学部教授)

キャンパスの年輪

—同志社今出川校地—



(増補改訂) B5判 二二二頁
一、五〇〇円 (送料三〇〇円)

社史資料室長
河野仁昭著

百十余年の歴史を経た今出川キャンパスには国の重要文化財に指定された彰栄館・チャペルなどの五棟を始め多くの建物あるいは既に姿を消した建物があります。

これらの由緒ある建物に限らず石段・記念碑・樹木を中心に、普段余り意識されていない様なものも含めて、それぞれに纏わる話題を軽妙なタッチで書かれた文章に、新旧の写真・地図などを掲載した話題の豊富な美しい書物です。

また巻末には新島襄の足跡・田辺新キャンパス誕生の経緯なども収録し、校友・同窓は青春時代を、在学生は多くの先輩が残された業績をしのぶ格好の書としてご購入ください。

●購入ご希望の方は、左記へ直接電話または文書でお申込みください。

●代金および送料は現品送付の際、振込用紙を同封しますから後日ご送金ください。

同志社収益事業課

京都市上京区今出川通烏丸東入る
電話(〇七五)一二五一—三〇三七・八

一 講義考

女子大学の教壇に立つようになって八年が来ようとしているが、いまだに講義には慣れない。

私の講義科目の一つは「食品化学」で、受講者約百名（多い場合には二百名近いこともあった）の家政学部食物学科の学生が対象の必修専門科目である。「食品化学」は専門科目とは言いながら、基礎の基礎、糖やアミノ酸の構造式から説明しなければならぬ科目である。多人数を相手の化学系の講義などというものはおよそ乱暴な話であると思われるが、それはともかくとして、女子大学教員となつた当初は、全くの手探り状態であつた。それまで学会発表ぐらいしか人前でしゃべつたことのない「教育に關しての素人」が、ある日、教壇で講義をすることになつたのであるから当然かもしれないが、不安が一杯であつた。学生のレベルはどうか、学生間にレベル差がある場合どのレベルの学生に焦点を合わすべきか、時間内に予

定の内容がこなせるであろうか、学生にどの程度理解してもらえるか、などなど。

多くの新任教員が講義を担当することになって、最初モデルにするのは、（実はこれが問題かもしれないが）まず自分の受けてきた講義形態ないしは方法であろう。いろんな講義を思い出し、お手本にしながら、先輩の先生のアドバイスもお聞きして、講義の準備を始めた。知らないことやあるいは曖昧な知識だった事柄も多く、初年度は準備に多くの時間がかかったが、随分と勉強になつた。しかし、相手の学生は新米の講義で随分と迷惑であつたであろう。

小、中、高校教師になるためには、「教科教育法」その他教育手段を学び、また教育に關する法律を学び、「免許」を取得し、試験にも合格しなければならない。しかし大学教員には特に教育に關する免許がなくてもなれる。日本の大学の教育制度は奇妙なものだなどそ

森田潤司

のとき考えた。

ここには研究面で優れているものは教育面でも能力を発揮できるとの暗黙の了解あるいは仮定がある。スポーツ分野でも名選手必ずしも名コーチあるいは名監督とならない。それは名選手にはいわゆる天才肌のひとが多くその技術獲得の過程には凡人にはわかりかねるものがあるからであろう。同じように、優れた業績を上げた研究者（私のことではないが……）が優れた教育者たり得る保証はない。しかしながら、大学教員の採用時に当たって教育能力はほとんどチェックされていないのではあるまいか。誤解を承知で言わせてもらうならば、大学の教育制度は最初からそれほど重視されていなく、大学教員に一番に求められているものは研究者としての能力であるということかもしれない。あるいは明治時代の少数のエリート大学での講義を含む教育スタイルがそのまま日本中の大学で踏襲されているということだろう。

さて七年目の現在、講義をスムーズにするためにプリントを整備するなど種々工夫もして講義も随分とスムーズになったと自分では思うが、「教育効果」は試験の成績で判断する限り、はかばかし（？）ない。奇妙なことに、自分としては下手な時代の方がよく聞いてくれて良く理解してしてくれたようなところもある。新米の頃の講義のスピードの方が、学生の思考のスピードとあっていたのかもしれない。基礎科目にあたるので基本的にどうしても扱わざるをえない項目があり、レベルダウンしないように多くの項目を取り扱おうとしたあまり学生が不消化を起こしたのであるうか。また、化学式を間違つてノートに写している場合があるので、それをそのまま覚え

てしまうと困るだろうと考えて、プリントで配布すると、ノートに移すという作業が省略されてしまったためか、なかなか化学式を覚えられないというような予期せぬ現象も生じている。レベルを落とさずにわかるように講義するというのは、むずかしいものである。小中学校の教研制度のような講義の方法を研究しあうのも必要かも知れない（大学の先生はプライドが高いので無理か？）。

大学での単位は、「要覧」によると、実は講義一時間に対して二時間の自己学習を要求しているようで、これを学生が十分実行していれば、学生の不消化問題などは解決されると思われるが、現代の学生がそれを実行しているとはとても思えない。もともと、大きな声では言えないが、自分自身として学生時代にそのようなことは知らなかったし、教務主任になって要覧を見直して初めて気のついたことであるが……。

もうひとつ此の頃考えさせられることに、出欠の問題がある。女子大学は「要覧」にも明記してあるように講義への出席を重視している。つまり、「授業時間の三分の一以上欠席した場合原則としてその科目の単位を習得することはできない」となっている。現実には受講者数が多すぎていちいち出欠を取れない科目もあり、たてまえとしてのことになってしまっており、実施は担当教員の裁量に任されているが、この出欠を取るかどうかというの悩みの種である。いったい出欠は何のために取るのであろうか（取らねばならないのであろうか）。女子学生の場合、出席率と成績は（経歴上）ある程度相關しているし、出席率の悪い学生は私生活上問題を抱えていることも多いので、学生を把握するために、ある程度意味はある。し

かし、出欠を取ると、単に出席していれば出席点なるものをもらえないのではないかと誤解して意欲のない学生が教室内に常時増えることになり、私語増加など教室の雰囲気が悪化する等の弊害も生じる。出欠を取ることで学生が教室にやってきて、一時間も講義を聞いていれば何かを掴んで帰ってくれるであろうとも以前考えたが、親の心子知らずというか、期待どおりにはならない。また三分の一は休んでもいいのだと、まるで権利のように考える学生も出てきている。

講義中、学生が私語してうるさい現象は近年著しい。学生はテレビの影響で十五分か三十分間しか集中できないのだとCMタイムのような息抜きタイムを考える教員もいると聞く。自分の講義のやり方が間違っているのかと随分悩んだが、これについても、学生自身の問題(何のために大学に來ているのかという目的意識の欠如)、大学をモラトリウム的に考える現代の風潮(明治時代からの悪しき風潮かも)、カリキュラムや教室規模を含む大学の問題、教員の講義方法など種々の要因の複合であると考えられ、ことは個人的問題だけではなさそうだ。今年試験的に出欠を取るのをやめたところ講義そのものは例年になく静かに行えた。出席率は、ざっと見たところ、約三分の二程度であった。しかし成績はどう出るか、結果はまだわからない。必修科目は不可で終わりのうわけにはいかず、次年度結局自分の所へ帰って来るので、また悩まなければならぬ。出欠を取るべきか、取らざるべきか、まるでハムレットである。

化学のようなシステムのきっちり教育しなければならぬ科目で、いったいどの様にすれば、百名の学生の理解度を把握しながら講義を含めて教育を進めることが可能だろうか。本来、フィードバ

ックを繰り返して、学生の理解を確認しながら講義を進めなければならない。いったんドロップアウトしてしまうとなかなか追いつけないからである。教員の一方的知識の放出であったり単にお話としておもしろいだけであつてはならない。さらに、基礎科目にあたるので基本的問題を扱わざるをえない。それに時間は限られているので、多くの項目を取り扱おうとするとさわりしか触れられない。しかしそれは学生からみると硬直したおもしろくない部分となる。高校の選択の関係で化学あるいは生物をほとんど学習していない学生も入ってくる等、レベルもまちまちである。偏差値重視の現代の入試制度の中で必ずしも自然科学系の好きでないものはいってきいてる。

こうした状況のなかで、どの程度の学生にどの程度理解させたら、よしとするのであろうか。到達度を調べようとレポートや小試験を課せば採点で研究時間を割かざるをえない。大学の教育はやつてもやつてもきりが無い代わりに、出来ないのは学生のせいだと責任を学生に押し付けてもまかり通つてしまう面もある。

特に女子学生の場合、専門を活かした仕事へ就職できる学生が現在まだ少ないということもあり、むずかしい。

こうなると、大学として、いったいどのような学生を育てようとしているのかという基本的問題に立ち帰らざるを得ない。「同志社時報」の前号(No.八七号)でも教育に関する議論がなされているが、本当に真剣に考えなければならぬ。女子大学食物学科のうち管理栄養士専攻課程においては来年度から管理栄養士国家試験の実施という問題を抱えている。関係する先生のお尻には火がつきかかつて

いるが、他の試験科目と直接関係のない科目の教員も腹をくくる必要がある。こういう問題は大学全体の学生気質や雰囲気を反映するものである。ここで思わぬ結果が出てからではもう遅い。

考えて行けば問題は研究と教育の両立の問題や大学のあり方にまで及ぶように思う。「優れた研究なくして優れた教育はない」という声も聞く。全くその通りであるが、ほとんど全員が研究職をめざすような大学であれば「背中を見て弟子は育つ」あるいは「技は教わるものでなく盗むものである」といった昔気質の職人的考えも良いが、現在までに大衆化した大学においてそれはなかなか通用しなくなっている。一方、「私学は教育が大事ですよ」と聞かされる。しかし、教育効果を上げるような努力に対して学内で正当な評価がなされているだろうか。

たとえば講義方法の改善面では、これからはOHPやスライド、ビデオあるいはコンピュータをつかった講義や演習が、視聴覚情報化時代を反映して増えて来るであろう。これに対して大学は十分対応しきれだけの態勢を取れるであろうか。化学でも、(語学のL Iのような) コンピューター学習講義やコンピュータを使ったシミュレーション実験などが必要となつてくると思われる。この際、設備面での整備はもちろん必要だが、そのプログラムを組んだりすると相当の時間、労力さらには費用が心要となる。それを日常の業務に余裕のない中でどうやって工面するのか。さらに教育Ⅱ講義にエネルギーを注いでもそれがいかほど評価されるか、という問題もある。研究での評価と共に教育面でのなんらかの評価も必要ではないだろうか。

教育の効果を上げるためには各個人の講義方法改良の努力がもちろん大切であるが、大学全体がシステムとして関わるべき時代に来ているように考える。どのレベルの、どの様な学生を育てるのか明確にし、きちんとしたカリキュラムを作らねばならない。そして教員の待遇面や設備面でさまざまな改善がなされなければならない。何人か教育専門の教員がいてもいいかもしれない。現在の有様は、学生は大学進学のための意識の点で、教員も研究か教育かという点で、どっちつかず中途半端な大学になっている。教員の講義持ち時間数は多く、会議など雑用は多い。解決されるべき問題は多いが、忙しさを理由に研究を怠り、その挙げ句、担当科目を、いわゆる「楽勝コースの科目」などと学生に言われている教員にはなりたくないものである。そんな教員の「背中を見て育つた」学生はいったいどのような人物になるのだろうか。

これからの厳しい大学間競争の時代、本当に実力ある学生を送り出した大学が生き残る時代がもうすぐそこに来ている。女の子だからまあいいか、専門家になるのだからまあいいか、そういうムードが学内にある限り、女子大学がいまより良くなることは絶対ない。何も研究至上主義や少数エリート養成校を目指せといっているわけではない。緊張感ある講義そして緊張感ある大学、教員も学生もまじめな努力し、そしてそれが認められる大学、そんな大学にしたいものである。

(女子大学助教授)